

LIFE LONG SPORTS

大阪府生活文化部 生涯スポーツ振興課 平成13年7月発行

21世紀 玉木正之 スポーツライター 生涯スポーツ社会づくりへの提言

地域のクラブは誰が作る？

ドイツのサッカー・クラブを取材したときのことである。

ハンブルガーSV(スポーツ・フェライン)というクラブの練習場を訪れて、わたしは呆然と立ち尽くしてしまった。そこには、サッカー場が4面もあった。ほかに、天然芝のフィールド・ホッケー場が1面と、テニスコートが30面ほどあった。さらに、バスケットボールとバレーボールとハンドボールが共用している大きな体育館があり、レストランやバー、サウナや20人くらいが一度に使えるシャワールームを備えたロッカールームもあった。

そこは、ブンデス・リーガー一部で首位争いをしている名門サッカー・チームの一流選手が練習に使う場所なのだが、夕方になるとテニス・ラケットを持った仕事帰りのOLや、バスケットボールを抱えた若者たちが、三々五々集まってきた。また、小中学生や、幼稚園に通うような小さな子供たちが、父親や母親のクルマに乗せられて、サッカー教室にやってきた。そうして、誰もが、一流のサッカー・プレイヤーと同じクラブで、スポーツを楽しんでいた。あるいは、子供を連れてきた父親や母親は、子供の練習が終わるまでのあいだ、バーやレストランで食事や四方山話に花を咲かせていた。

なるほど、これが「地域密着型の総合スポーツクラブ」というものなのだ。そのとき、わたしは、はじめて納得した。ヨーロッパでは、スポーツクラブが、スポーツを行う場所という以上に、地域社会の核になっているのだ。百聞は一見にしかずとは、よくいったものである。

アメリカのベースボールのマイナーリーグ(メジャーリーグの下部組織)のチームがある都市でも、同じような光景を見たことがある。観客が1万人も入れれば満員になる野球場で試合があるときは、試合開始の3時間くらい前から観客が集まりはじめ、駐車場兼用のピクニック席(野球を見ながら家族で食事のできる椅子と机のある席)では、そこかしこでパーベキュー・パーティがはじまった。近所の人達と、あるいは、そこで初めて出逢った人達と、みんなでビールを飲み、焼き上がったばかりの肉やトウモロコシやフランクフルトを頬張りながら、野球の話だけでなく、子供の教育の話をしたり、ゴミの処理や、商売の話をしたり.....。

そこは、地域の情報交換の場所でもあった。スポーツを楽しむ、とは、こういうことなのだ。スポーツは楽しい。

だから、人が集まる。人が集まるならば、いろんな話ができる。それが、スポーツクラブというものなのだ。ハンブルガーSVのバーで談笑していた父親たちに、「素晴らしいスポーツクラブが近くにある、いいですね」と話しかけたところが、こんな答えが返ってきた。

「私は、半年前にバイエルンから引っ越してきたんだけど、バイエルンのクラブのほうが、もっと良かった。サッカー場の芝生ももっと綺麗だったし、バーで出されるソーセージももっと美味かった。ここはダメだな、そういったあと、つづけて彼の口からでてきた言葉に、わたしはもっと驚いた。「だから、せめて芝生くらいはもう少し整備してくれと、明日、市役所へ行って頼んでみるよ」ハンブルガーSVは、税金とサッカークラブの収入と、クラブの会員の会費で運営されている。だから、彼ばという権利がある」という。わたしは、「芝生があるだけマシじゃないか」といおうかと思ったが、その言葉を呑み込んだ。豊かな社会とは一人一人の住民が作るものなのだ、と理解できると、その言葉は恥ずかしくて口にできなかった。

Contents

なみはやスポーツネット
オリンピック
地域生涯スポーツ推進協議会
スポーツ専門家からの提言
なみはやスポーツ振興基金
障害者スポーツ
生活習慣病・上手な水分補給
モッピークラブの活動



Vol. 7